

中上級日本語学習者による形容語彙の産出 ——韓国語母語の学習者の場合——

黒崎亜美・松下達彦

要 旨

会話や作文の語の産出には、意味理解のほか文脈や連語等の知識が必要な上、既知語彙の検索の過程を経ねばならず、理解と異なる能力が必要である。そこで、中上級の韓国語母語の日本語学習者を対象に語彙の自由想起の実験を行ない、以下の諸点を示した。①中上級の韓国語母語の日本語学習者は日本語母語話者に比べ高頻度のプロトタイプ的な語を使用し、低頻度語彙の産出が少ない。②中上級の韓国語母語の日本語学習者は、第一言語（韓国語）の語彙の自由産出において、第二言語（日本語）より低頻度の語彙を産出し、日本語母語話者の第一言語（日本語）と語彙頻度レベルに差はない。③中上級の韓国語母語の日本語学習者の自由想起の語彙産出は文法テストや制限付き産出確認テストの結果と相関はなく、語彙の自由産出の発達には制限付き産出の発達に比例しない。④制限付き産出ができた語を自由想起できない場合、その語と語義の一部が重なる語を、自由想起することがある。以上の結果から、自由発表語彙を増やすには、語彙を検索・使用する機会を多くすることが必要だと考える。

【キーワード】 中上級学習者、形容語彙、語彙産出、自由想起、語彙の検索

1. はじめに

近年、第二言語（以下、L2）の語彙習得に注目が集まり、日本語を対象にした研究も出てきている。語彙知識の広さと深さの関係（松本・堀場2007）、既知語率と文章理解・聴解の関係の研究（小森ほか2004、三國ほか2005）、漢字語の意味推測、母語知識の転移の研究（Mori & Nagy 1999, Mori 2003, 加藤2005）、読解と語彙学習（吉澤2005, Moroishi 2006）などがあげられる。しかしこれらは、語の受容中心の研究であり、産出を扱ったとしても、対象語の手がかりを与えられた条件での産出タスクが多い。

しかしながら、現実の会話や作文では、既知語彙全ての中から適切な語を検索しなければ産出できない。語の産出では意味理解のほかに文脈や連語等の知識が必要とされる上、検索の過程を経なければならず、理解とは異なる能力が要求される。したがって、一つの語の習得といってもさまざまな側面の知識がどのように習得されているのかが問題になる。

Nation (2001) は語彙知識を形式的知識、意味的知識、使用的知識に分け、それぞれを理解と使用の知識に分けている (p.26-28) が、Melka (1997) は受容と産出が相互に依存した二つのシステムなのか一つの語彙システムにおける受容的使用と産出的使用なのか、不明だとしている (p.101-102)。受容と産出について、その発達に注目したLaufer (1998) は、語彙をそのレベルにより「受容 (passive) 語彙」「制限付き発表 (controlled active) 語彙」「自由発表 (free active) 語彙」の三つに分類し、「受容語彙」と「制限付き発表語

彙」は1年間で増加傾向を見せたが、「自由発表語彙」は全く伸びなかったとし、受容した語彙は「強制的に使う（‘pushed’ to use）」ようにしむけられなければ活性化されず、受容語彙のまま留まる可能性が高く、語彙が産出されるようになることはむしろかしいという（p.267）。もしそうだとすれば、中上級レベルにおいて、会話や作文における語彙使用が当該レベルよりも低く留まる可能性があるということである。

確かに、情景描写や印象の叙述といった上級レベルの創造的表現は、低頻度語彙の使用によって洗練される。例えば「住宅街」を形容するのに「静かな」より低頻度の「閑静な」を用いるという場合であるが、そのような低頻度語彙については、受容はできても産出できない中上級学習者が少なくないように筆者には思われる。

そこで、本稿では形容語彙に焦点を当て、中上級の韓国語母語日本語学習者の自由想起における形容語彙の産出について実験およびテストを用いて研究した。本研究は母語による違いを調査することを主眼とはしていないが、L2での語彙産出のメカニズムを探究するためのパイロットスタディとして韓国語母語話者を調査する。

本研究の課題は以下の四点である。(1)日本語の自由想起において(日本語)母語話者(以下、NS)と日本語学習者(以下、NNS)(上級/中級)では、形容語彙の産出にどのような差が見られるか。(2)同じ中上級NNSの自由想起での形容語彙の産出には、L2(日本語)とL1(韓国語)では差が見られるか。(3)形容語彙において、自由産出の発達は制限付き産出の発達と比例するか⁽¹⁾。(4)NNSがL2(日本語)で語彙の産出ができない場合、語を知らないためか、あるいは既知語彙からの検索ができないためか。

2. 調査概要

2-1 【実験】NSとNNSによる自由想起の語彙産出の比較

2-1-1 実験の概要

自由想起での語彙産出におけるNSとNNSとの差を明らかにするための実験を行なった。

この実験は、映像・色などの視覚的情報から自由に語彙を想起するもので、実験参加者が産出する語彙は、受容語彙から自由に検索できる語彙であると考えた。

[参加者]

日本語母語話者：20代の37人(M=21歳9ヶ月, SD=1歳4ヶ月)(Mは平均, SDは標準偏差, 以下同)。

韓国語母語話者日本語学習者：20代の39人(M=24歳7ヶ月, SD=3歳2ヶ月)。滞日期間3~21ヶ月(M=8.5ヶ月, SD=5.6ヶ月)。日本語学習1000~1600時間程度で、日本語能力試験1級レベル学習中の中上級日本語学習者。

[材料]

テレビコマーシャル2本(以下, CM1, CM2)(各15秒)と単色カード2種類(赤, 青)。

CM1：京都の古寺の紅葉を背景とした、鉄道会社のコマーシャルで、「落ち着いた」「静かな」「おだやかな」といった形容詞が産出されることを予想したもの。

CM2：軽自動車のコマーシャルで、全体に明るい色調の中、若い女性が車に乗って走り出す様子を映しており、「軽快な」「元気な」「楽しい」「明るい」といった形容詞の産出を予想したもの。

単色カード：B4サイズで、赤のHSL閾数は、色合い：0／彩度：255／明度：128で、青は色合い：170／彩度：255／明度：153。

[手続き]

課題1：CM1を視聴後、10分間で想起した形容表現を10語、回答用紙に記入するように指示した。

課題2：CM2を視聴後、課題1と同様の課題を実施した。

課題3：赤の単色カードを提示し、想起した形容表現を5語、回答用紙に記入するように指示した。

課題4：青の単色カードで、課題3と同様の課題を実施した。

各参加者は課題1～4で合計30語を産出することになる。

NSにはL1（日本語）で回答を求め、NNSには、まずL2（日本語）で、1ヶ月後、（課題2のみ）L1（韓国語）での回答を求めた。NNS各自所有の辞書により、回答を日本語単語1語に訳すよう指示し、そのNNSによる日本語訳語を頻度の比較や意味解釈に用いた。

NNSのL1（韓国語）での実験を1ヵ月後にしたのは、L2（日本語）での実験の際に対応するL1を想起することによる学習効果を回避するためである。L1（韓国語）での実験を課題2のみにしたのは、実験参加者の翻訳による過度の負担を回避するためである。また、NNSのL2（日本語）の実験の後、課程を修了した学習者などがいたため、1ヵ月後のL1（韓国語）での実験に参加できたのは15人のみであった⁽²⁾。訳された回答についてはプロの翻訳者を含む日韓両語に熟達した韓国語母語話者2名により誤りがないかどうかチェックし、完全な誤訳だと思われるもののみ、分析から除外した。

韓国語による回答を、学習者自身による日本語の翻訳語によって分析することには、意味や使用頻度が等位に対応する保証がないという欠点がある。しかし、一方で、原語（韓国語）に複数の語義があり、高頻度の用法と低頻度の用法がある場合に、本人が辞書を使用して訳語を定めることで、どの語義で産出したのかが明確になるという利点がある。また、各言語の語彙頻度表の標本採集の規模や方法の相違による誤差の問題も考慮すると、原語の頻度をそのまま使用するよりも、一つの語義に定めた上で日本語の頻度という一つの尺度にするほうがより正確な比較ができると考え、このような方法を採用した。また、実験参加者に学習の一環として参加してもらえるとという実施上の都合においても、この方法のほうが優れていた。

[分析対象および測定方法]対象とする語句として、①事物から受けた印象を伝える語句であること、②品詞は形容詞に限定しない、③名詞の場合、形容詞、形容動詞などを名詞化したもの（例：「明るさ」「親しみ」など）、④固有名詞（例：「竜安寺」「清水寺」など）などは含まない、⑤「～みたい」「～のよう」（例：「太陽みたい」など）は含まない、という条件を満たすものを抽出し、それ以外は対象外とした。

語彙産出を測定する方法にはいくつかあるが、ここでは、低頻度語彙の産出の程度を測定する語彙の洗練性（lexical sophistication）と、産出語彙を頻度レベルごとに割合で示す語彙頻度プロフィール（the Lexical Frequency Profile：LFP）（Laufer and Nation 1995）に注目した。語彙使用頻度は国立国語研究所（2006）⁽³⁾を参照し、語彙頻度プロフィールは、日本語能力試験出題範囲の語彙の級別をKawamuraほか（1997）で参照した⁽⁴⁾。

2-1-2 結果

表1 自由想起における級別の産出語数・割合

実験参加者	母語	産出言語	級外	1級	2級	3級	4級	計
NS	日本語	L1(日本語)	273 (24.6%)	173 (15.6%)	297 (26.8%)	91 (8.2%)	276 (24.7%)	1110 (100%)
NNS	韓国語	L2(日本語)	88 (7.5%)	88 (7.5%)	333 (28.5%)	147 (12.6%)	514 (43.9%)	1170 (100%)
NNS	韓国語	L1(韓国語)	37 (24.7%)	25 (16.7%)	41 (27.3%)	7 (4.7%)	40 (26.7%)	150 (100%)

注1: 級は日本語能力試験の出題基準に基づく

注2: NNSのL1(韓国語)での実験は課題2のみ。NNSのL2(日本語)の実験の後、課程を修了した学習者などがいたため、1ヵ月後のL1(韓国語)での実験に参加できたのは15人のみであった。

表2 自由想起における産出語数の級別の分布の独立性の検定

実験参加者	母語	産出言語	独立性の検定の対象		
			L1(日本語) n=37	L2(日本語) n=39	L1(韓国語) n=15
NS	日本語	L1(日本語)	-		
NNS	韓国語	L2(日本語)	$[\chi^2(4)=207.99, p<.001]$	-	
NNS	韓国語	L1(韓国語)	$[\chi^2(4)=2.40, n.s.]$	$[\chi^2(4)=70.87, p<.001]$	-

表3 自由想起における産出語数の級別比較

	級外	1級	2級	3級	4級	計
NS L1(日本語) n=37	273 (24.6%)	173 (15.6%)	297 (26.8%)	91 (8.2%)	276 (24.7%)	1110 (100%)
NNS L2(日本語) n=39	88 (7.5%)	88 (7.5%)	333 (28.5%)	147 (12.6%)	514 (43.9%)	1170 (100%)
級別の独立性の検定の結果	$[\chi^2(1)=124.59, p<.001]$	$[\chi^2(1)=36.54, p<.001]$	$[\chi^2(1)=0.82, n.s.]$	$[\chi^2(1)=11.61, p<.001]$	$[\chi^2(1)=91.45, p<.001]$	
全体の独立性の検定の結果	$[\chi^2(4)=207.99, p<.001]$					

注1: 級は日本語能力試験の出題基準に基づく

注2: 級別分析では、当該級の度数と、その他の級の度数の比率を比較するために、独立性の検定を行なった。

注3: 級別分析では、NSとNNSを5回比較している。そのため、ボンフェローニの調整(0.05/5=0.01)により、1%を有意水準とした。

<語彙頻度プロフィールの比較>

日本語能力試験の級別の産出語数を数え(表1)、分布の差の有無を調べた。その結果、産出言語がL1(日本語)とL2(日本語)の場合と、同一のNNSのL1(韓国語)とL2(日本語)の場合には差があったが、L1(日本語)とL1(韓国語)には差がなかった(表2)。

そこで日本語での実験についてNSとNNSを級別に比較するため、各級の度数をその他の級の度数と比較する独立性の検定を実施したところ、2級以外はすべて有意に独立性が高く(表3)、残差分析の結果もNSとNNSの各級がすべて有意であった。この結果、級外と1級ではNSの方が産出割合が高かったが、3級、4級ではNNSの産出割合がNSより高かったといえる。

また、「級外+1級」(上級以上)と「2級~4級」(中級~初級)に分けて、それぞれの結果の独立性を検定した場合でも⁽⁵⁾、L1(日本語)とL2(日本語)、および同一のNNSによるL1(韓国語)とL2(日本語)ではいずれも独立性が有意であった【それぞれ $\chi^2(1)=182.43, p<0.001$, $\chi^2(1)=62.18, p<0.001$ 】、すなわち、1级以上と2級以下では度数の分布が有意に異なっており、残差分析の結果もL1とL2の各レベルとも有意であったため、1级以上ではL1のほうがL2より産出が多く、2級以下ではL1よりL2のほうが産出が多いということが示された。しかし、L1(日本語)とL1(韓国語)では分布に差がなかった【 $\chi^2(1)=0.07, n.s.$ 】。

<頻度の比較>

国立国語研究所(2006)を参照し、NNSとNSで、自由想起した日本語語彙計30語の頻度の平均を比較した結果、NSの方が全体的に低頻度語彙を産出しており、課題別に見ると課題1と課題4に差が見られた(表4)。同様に、課題2のみ、L1(韓国語)とL2(日本語)、L1(日本語)とL1(韓国語)を比較したところ、前者の平均(M=66.8, SD=28.3, M=129.5, SD=37.5)には差が見られたが【 $t(28)=5.17, p<0.001$ 】、後者(M=78.6, SD=36.5, M=66.8, SD=28.3)には差がなかった【 $t(50)=1.12, n.s.$ 】。

表4 自由想起における産出語彙の頻度平均の比較

	NS L1(日本語) n=37		NNS L2(日本語) n=39		平均の差の検定 の結果
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
課題1(CM1)	90.7	210.50	143.0	284.79	[$t(67.45)=6.13, p<.001$]
課題2(CM2)	76.1	99.23	111.0	106.93	[$t(57.29)=1.53, n.s.$]
課題3(単色赤)	62.0	81.70	85.9	160.25	[$t(53.48)=0.88, n.s.$]
課題4(単色青)	52.3	55.95	88.2	126.97	[$t(67.30)=2.48, p<.001$]
全体	74.7	140.90	113.7	195.59	[$t(74)=8.77, p<.001$]

注1: 数字は国立国語研究所(2006)の自立語738,377語中の度数

注2: Mは平均, SDは標準偏差

2-1-3 考察

自由想起する語彙は、中上級レベルのNNSよりもNSのほうが洗練され、低頻度である。また、同一のNNSの場合、L1(韓国語)とL2(日本語)では、L1のほうが洗練度が高く、低頻度語彙が産出されており、L2(日本語)で低頻度語彙が産出されないのは、語が表す概念を持たないのではなく、概念はあるがそれを表す語を産出できなかったのだといえる。

なぜそうなったのかを考えるため、個々の実験参加者がL1(韓国語)とL2(日本語)でどのような語彙を産出しているかに注目し、同一の参加者であるNNSがL1で多く産出した語とL2で多く産出した語(4人以上の実験参加者の産出が見られたもの)を日本語能力試験の級別によって比較した(表5)。

表5 課題2において産出が多かった語のL1(韓国語)とL2(日本語)の産出の比較

L1(韓国語) n=15				L2(日本語) n=15			
語	回答数(人)	級	日本語での産出	語	回答数(人)	級	韓国語での産出
明るい(밝음)	11	4級	○	軽い	9	4級	○
軽い(가볍다)	7	4級	○	かわいい	8	4級	○
きれい(귀엽다)	6	2級	○	明るい	7	4級	○
さわやか(상쾌함)	6	2級	○	きれい	7	2級	○
かわいい(귀엽다)	5	4級	○	白い	7	4級	○
軽快(경쾌함)	5	1級	○	楽しい	5	4級	○
さっぱり(산뜻함)	4	2級	○	女性/女性的	4	3級	○
洗練(세련)	4	級外	×	小さい	4	4級	○
はつらつ(말랄함)	4	級外	×	はやい	4	4級	○
				安い	4	4級	○

注:「日本語での産出」はL1で自由産出された語のL2対応語が産出されたか否かを、「韓国語での産出」はL2で自由産出された語のL1対応語が産出されたか否かを示す。○は産出あり, ×は産出なし。

L2で産出した語彙は、10語のうち、4級が8語、3級が1語、2級が1語で、圧倒的に初級語彙に偏っている。それに対し、L1で産出した語の訳語を見ると、4級が3語、3級は0語、2級が3語、1級が1語、級外が2語となっており、上位5語のうち、「さわやか」(2級)を除く「明るい」「軽い」(以上4級)「きれい」「かわいい」(以上2級)の4語は、L2での上位4語と一致するが、そのほかは一致していない。一般にL2において自分の表現したいことに相当する語を産出できない場合には、類義の語による「代用」、新語の「造語」、言いたいことそのものを変える「回避」の、三つのストラテジーが考えられるが、例えば頻度が低く洗練性の高い「軽快」を産出できないかわりに基本語の「軽い」「はやい」を産出したというように、代用が見られることが表5から推測できる。同様に「さわやか」「さっぱり」も「明るい」「きれい」「白い」などで代用された可能性がある。

いずれにしても、L2では相対的に頻度の低い語彙が産出されておらず、それらは「軽い」「はやい」に対する「軽快」のような類義関係にある語が複数含まれており、それらが産出されないのは、概念自体を持たなかったのではなく、それを表す語を産出できなかったのだということは確認できたと考える。

2-2 【テスト】 語彙の制限付き産出と自由産出、文法力の比較

語彙の自由産出の能力は、制限付き産出の能力(既存の語彙知識を検索しやすい文脈を伴った状態での産出能力)と比例するのか、NNSがL2で語彙の産出ができない場合、語を知らないためなのか、それとも検索の手がかりが乏しいためなのかを検討する。もし、自由想起の実験において、低頻度語彙を知っていながら産出していなかったのだとすれば、学習者は理解しているその語を検索できなかったことになる。これらを明らかにするため、実験参加者に制限付き産出確認テストを行なった。また、文法力、ひいては日本語学習の一般的な進捗との関係を見るための一つの指標として、文法テストを併せて行なった。

2-2-1 テストの概要

[参加者] 語彙の自由想起の実験に参加した中上級日本語学習者39人である。

[制限付き産出確認テスト] NSの実験参加者が前節の実験で自由想起した語彙のうち、課題1と2でそれぞれ使用頻度の高かった上位15語を選び、そこから日本語能力試験級外、1級、2級に当たる語彙を抽出した(計25語)。そして各語の仮名表記の最初の1文字をクローズしたテスト(対象語以外は漢字表記も使用)を作成し、実験終了直後に実施した。

制限付き産出確認テストで取り上げた語は以下の25語である。

おだやか / けいはい / せいけつ / にこやか / さわやか / しんびてき / そうごん /
 いやす / こふう / ゆうが / せいそ / リズミカル / じゅうこう / かわいらしい /
 きれい / わふう / ゆったり / あざやか / しずか / せいじゃく / シンプル /
 おごそか / おちついた / なつかしい / かるやか

事前にNS10人に制限付き産出確認テストを行なった結果、9人が25点満点、1人が24点(M=24.9, SD=0.32)であり、NSであればほぼ満点がとれることを確認した。

制限付き産出確認テストは、単文の文脈か

制限付き産出確認テスト 例

- 1 秋らしい、____^{きこう}だやかな気候だ。
- 2 ____^{きよく}いかいなテンポのいい曲だ。

ら特定の語彙を産出するテストで、受容語彙を測定するものではないが、①文脈が与えられている、②語形の手がかりが与えられている、③NSであればほぼ満点が取れる、ということから、自由想起で検索が可能な語彙と比較すると、受容的語彙知識に近い知識を測定していると考えられる。少なくとも（失語症等の障害がない限り）制限付き産出には語彙知識の受容が必要条件である。

[文法テスト] 適語補充，四肢選択形式40問。日本語能力試験の形式を踏襲し，内容的妥当性を考慮の上，1級レベル20問，2級レベル20問を作成した⁽⁶⁾。

2-2-2 結果

NNSの制限付き産出確認テストの成績は25点満点でM=10.8（正答率43.2%），SD=3.6で，この結果を，事前に行なった文法テストと比較すると，中程度の相関があったが，それ以外のすべての課題の成績と相関が

表7 語彙項目別に見た制限付き産出，自由想起，語彙使用頻度の関係(NNS, L2日本語) n=39

語	A	B	C
	制限付き産出テストの正解者数(人)	自由想起での産出人数(人)	語彙使用頻度(注)
静か	38	27	67
きれい	37	26	162
シンプル	37	11	79
落ち着く	34	13	53
なつかしい	33	3	49
かわいらしい	29	0	14
さわやか	28	7	45
おだやか	26	3	23
リズムカル	24	2	4
和風	20	2	23
神秘	16	1	16
古風	16	1	3
鮮やか	15	1	32
清潔	14	3	23
にこやか	14	0	3
ゆったり	13	0	37
軽快	9	1	27
癒し	9	1	3
軽やか	3	1	22
荘厳	3	1	4
厳か	2	0	1
優雅	1	0	22
清楚	1	0	10
重厚	1	2	8
静寂	1	0	4

AとBの相関(ピアソン): $r = .698, p < .01$

BとCの相関(スピアマン): $\rho = .675, p < .01$

AとCの相関(スピアマン): $\rho = .647, p < .01$

注: 国立国語研究所(2006)の自立語738,377語中の度数

表6 制限付き産出確認テスト，文法テスト，自由想起の実験の結果と相関

	M	SD	制限付き産出確認テストとの相関(注1)
制限付き産出確認テスト(NNS) (25点満点) n=39	10.8	3.6	
文法テスト(NNS) (40点満点) n=39	30.2	6.0	$r = .579, p < .01$
自由想起の実験(NNS) (L2日本語) n=39	15.0	9.1	$\rho = -.078, n.s.$
各参加者の「級外+1級」の産出割合平均			
各参加者の産出語彙計30語の頻度平均(注2)	113.7	31.4	$\rho = .027, n.s.$

注1: 文法テストの結果との相関にはピアソンの相関係数を，自由想起実験結果との相関にはスピアマンの順位相関を使用した。

注2: 国立国語研究所(2006)の自立語738,377語中の度数

なかった(表6)。特に、「1級+級外」の語の産出割合とも，産出された語彙の使用頻度の平均とも相関がない。

テストの各語彙項目別に見ると，制限付き産出確認テストの正解者数と自由想起での産出人数，制限付き産出確認テストの正解者数と語彙使用頻度，語彙使用頻度と自由想起での産出人数のいずれにも相関がある(表7)。

2-2-3 考察および語彙の自由産出力との関係

受容的な語彙知識は，文法知識の発達とはある程度比例する(日本語能力試験実施委員会・日本語能力試験企画小委員会(2008) p.66⁽⁷⁾，ほか)ので学習の進捗に伴って発達していくと考えられるが，語彙を自由に検索し産出する能力とは，少なくとも中上級レベルにおいては，相関が出なかった。このことは2.1の結果や先行研究とも合わせて考えると，語彙の自由産出力の発達が受容や制限付き産出に比べて中級レベルで停滞する可能性を示す⁽⁸⁾が，一方で語彙項目から見ると制限付き産出確認と自由産出に人

数の点で相関があるということは、このデータの範囲において、語彙は受容と産出ともに頻度順に発達するのだと推測される。この点は、今後、上級以降の発達を調べることで、発達がそのまま停滞しやすいのか、停滞する時期を越えると再び自由発表語彙の量が増える傾向があるのか、学習条件との関係や個人差との関係とも合わせて、確かめることができるであろう。

制限付き産出確認テスト正解者人数と、その語を自由想起で産出した人数との関係に注目すると、多くの中上級学習者が自由想起できる語彙は一部に集中している(表7)。頻度が50以上あるのは「静か」「きれい」「シンプル」「落ち着く」の4語で、これらは、正解者数が多く、産出した人数も多い。反対に、「静寂」「清楚」「優雅」などは制限付き産出確認テストで一人しか正解者がなく、自由想起は0人で、多くは低頻度語彙である。これらに関しては、前者は概ね「知っていたから使えた」結果だと考えられる。そして、後者は「知らなかった」、あるいは少なくとも、検索の手がかりが与えられている状況でも適切な語を検索して使えるレベルまでは習得されていなかった結果と考えられる。

注目すべき点は、それ以外の語、すなわち「知っているのに使えなかった」語である。制限付き産出確認テストで20人以上の実験参加者が正解しており、かつ、自由想起した人数が少ない語は「かわいらしい」「さわやか」「おだやか」「リズムカル」「和風」の5語である(表7内のグレーの部分⁹⁾)。これらの語について、制限付き産出確認テストで正解しながらも自由想起していない実験参加者が、かわりに想起した語の特徴を検討してみると、NNSが一人も自由想起していない「かわいらしい」については、NNS39人中17人が類義語の「かわいい」を自由想起している。

制限付き産出確認テストにおいて「さわやか」に正解していながら同語を自由想起しなかった実験参加者は、「さっぱり」「自然」「気持ちいい」を自由想起している。これらも「さわやか」と語義の一部が重なる語である。同様に「おだやか」の正解者では「やわらかい」「楽」「ゆっくり」が自由想起されており、「和風」の正解者は「クラシック」「なつかしい」などを自由想起している¹⁰⁾。

これらのことを2-1の結果とも合わせて考えると、L2での語彙産出においては、語彙ネットワーク(学習者の脳内において意味などの関係で結ばれた一群の語彙)においてプロトタイプ的な中心語(例:「ゆっくり」)の初級での習得が、それ以降語義の重なる低頻度語彙(例:「おだやか」)の産出の障害となるという可能性を示唆する。Andersen(1984)はヨーロッパの6言語の習得研究を検証し、中間言語構築の過程において既習得の表現と類義の形式の習得は遅れるという「1対1の原理」(One to One Principle)を提唱しているが、本研究の結果は限られた対象であるとはいえ、その原理を裏付ける例証の一つのように思われる。産出語彙を増やすためには受容語彙が増えることは必須の過程であるが、それは必要条件ではあっても十分条件ではないと考える。

上記の認知的側面に加えて、社会的コンテクストや情意的側面も影響している可能性がある。プロトタイプ的な基本語の使用では表現の洗練度は上がらないが、安心して使用することができ、コミュニケーション上の障害となることも少ないからである。

3. 結論, 教育への示唆, および今後の課題

以上の実験と制限付き産出確認テストの結果, 日本で学習する韓国語母語学習者の日本語の形容表現の産出について, 次の4点を示した。

- (1) 中上級NNSはNSに比べ高頻度のプロトタイプ的な語(例:「軽い」)に産出が集中し, 低頻度語彙(例:「軽快」「軽やか」)の産出が少ない。
- (2) 中上級NNSは, L1(韓国語)の自由想起による語彙産出で, L2(日本語)より低頻度の語彙を産出しており, NSの使用語彙頻度との間にレベルの差はない。すなわち刺激から概念を想起する段階で両者に差があるのではなく, L2語彙の検索において上級レベル(日本語能力試験1級合格レベル)でもL1に及ばない。
- (3) 上記(1), (2)の結果は制限付き産出確認テスト, 文法テストの結果とは相関がない。すなわち, 自由発表語彙の発達は制限付き産出語彙や文法力の発達に比例しない。
- (4) 制限付き産出ができた語を自由想起できない場合, その語と語義の一部が重なる語を, 自由想起することがある。

以上の結果から, 学習者が会話や作文で洗練度の高い表現を使えるようになるには, プロトタイプ的な語の類義表現を, 受容的に学ぶにとどまらず, それらの語彙がどのような場面で, どのように使用されているのかを学習し, 産出できるようにすることが必要だと考える。洗練度の高い表現でなければ達成できない表現効果を学習者が実感するような学習方法や, そのような表現の使用を誤りのリスクを恐れずに使用できる場を作ることが必要ではないだろうか⁽¹¹⁾。また, 語の形式の手がかりが先行文脈に存在しない状態における, 脳内の心理辞書からの語の検索を伴うような学習方法も有効だと思われる。学習目的によっては, 視覚などの感覚刺激から豊かな語句を想起する練習が必要であろう。Barcroft(2007)は, 絵を使用した条件で語を学習した後の, 学習者自身による脳内の心理辞書の検索(retrieval)の記憶に対する効果を確認した上で, コンピュータを利用した方法などを提案している(p.51)。ほかにも, ビデオや写真を見て情景を描写したり, 印象を述べたりする課題を設定し, プリタスクとしてビデオや写真の中の特定の事物の描写や印象に関わる語を想起するといった方法も考えられる。

今後の課題として, 以下の二点を挙げる。

第一に母語による相違の検討がある。本研究では, 韓国語母語話者に限定したが, 他の母語を持つ日本語学習者では異なる結果になると予想される。例えば, 中国語母語話者なら漢字語の影響が実験結果に反映されるかもしれない。英語母語学習者も母語知識によって外来語を検索するなど, 異なる方略で語彙を検索し, 産出する可能性がある。

第二に, 語彙産出の発達を更にレベルの高い学習者まで見る必要があるということである。本研究の対象は中上級学習者であるが, 超上級ではどのような語彙産出の傾向が表われるか, 超上級学習者と母語話者ではどのように語彙産出が異なるか, 調査が必要である。

今後は様々な条件の学習者がどのような語彙学習の活動を行なうことで, 受容語彙を検索し, 産出できるようになるのかを追究したい。そして, より効率よく受容語彙を産出語彙へと移行する学習活動を提案したい。

謝辞

本稿は、筆頭執筆者の黒崎が2007年1月に桜美林大学大学院に提出した修士論文の一部を加筆修正したものです。実験に協力してくださった多くの方々、また、実験の機会を提供して下さった各校の加藤早苗先生、西郡仁朗先生、堀口純子先生、統計処理に関しアドバイスを下さった玉岡賀津雄先生に感謝の意を表し、厚く御礼申し上げます。

注

- (1) 「自由発表（語彙）」「自由想起」「自由産出」は類似の概念を表すが、本稿では、語彙の種類を問わず場合にはLaufer(1998)（訳語は野呂2003）に従い「自由発表（語彙）」とし、本研究の実験課題を示す場合には「自由想起」を用い、それ以外には「自由産出」を用いる。
- (2) 15人は多くないが、統計的検定では差に対して被験者数が少ない場合には有意差が出ないため、検定で有意差が出れば差があると言える。有意差がない場合は断定的なことは言えないが、本稿の独立性の検定では15人は少なくはないと考える。
- (3) 1994年発行の月刊雑誌のうち分野と発行部数を考慮して選ばれた70誌を対象とした語彙調査で、自立語と付属語の表がある。本稿では自立語の表における各語の「全体度数」（出現度数）を用いた。なお、この表の自立語の延べ語数は738,377語である。
- (4) 日本語能力試験の語彙使用の級別は、正確な意味での語彙頻度プロフィールではないが、日本語教育の現場では能力試験の級別の語彙使用頻度を知ることがより現実的な意味を持つと考え、この方法を採用した。
- (5) 「級外+1級」と「2級～4級」に分けたのは、「静かな」に対する「閑静な」のような、プロトタイプの中心語に対する下位語が上級になると格段に増え、洗練度は上級（同1級以上）と中級（日本語能力試験2級まで）でより大きな差が出ると考えられるためである。
- (6) 日本語教育学会編(1998)(1999)などを参照し、弁別力の高い項目を選んで作問した。
- (7) 2005年度の日本語能力試験(n=112951)における「文字・語彙」のテストと「読解・文法」のテストの得点の相関は1級で0.686, 2級で0.666, 3級と4級では0.8以上となっている。これらはいずれもすべての級において、「文字・語彙」「聴解」「読解・文法」の試験の間の三つの相関の中で、最も高い数値となっている。
- (8) このことは英語語彙習得におけるLaufer(1998)、石川(2005)などの結果とも一致する。ただし、Laufer(1998)はイスラエルで英語を外国語として学ぶ高校生が対象である。受容語彙と発表語彙が相関するかどうかに関する英語語彙習得の先行研究についてはMelka(1997)、石川(2005)に簡潔にまとめられている。
- (9) 「なつかしい」は、NSとNNSの文化差で産出されなかったと考えられるので除外する。
- (10) そのような関係に当たる語彙が「リズムカル」では見られなかった。これは、制限付き産出確認テストにおいて「リズム」という比較的高頻度の語との語形が似ていることがヒントとなり、低頻度のわりに正解者が多かったためであろう。
- (11) Laufer(1998)は学校教育において誤用訂正が強調されがちで語彙の豊かさが高く評価されることが少ないことが難度の高い語彙を使用するリスクを回避させているのではないかと述べている(p.267)。日本語学習者においても、同様の可能性がある。

参考文献

- (1) 石川慎一郎(2005)「大学生英語学習者の受容語彙力と発表語彙力の関係 ―語彙サイズテ

- ストおよびエッセイ・コーパス分析に基づくアプローチ」『中部地区英語教育学会紀要』34号, 337-344
- (2) 加藤稔人(2005)「中国語母語話者による日本語の漢語習得 —他言語話者との習得過程の違い—」『日本語教育』125号, 96-105
 - (3) 国立国語研究所(2006)『現代雑誌200万字言語調査語彙表』公開版 (ver.1.0)
<http://www2.kokken.go.jp/goityosa/index.html> (2007年1月11日)
 - (4) 小森和子・三國純子・近藤安月子(2004)「文章理解を促進する語彙知識の量的側面 —既知語率の閾値探索の試み—」『日本語教育』120号, 83-91
 - (5) 日本語教育学会編(1998)(1999)(2008)『日本語能力試験 分析評価に関する報告書』平成8年度－平成9年度・平成17年度, 国際交流基金/日本国際教育協会
 - (6) 野呂忠司(2003)「第7章 英語の語彙知識と言語運用」門田修平編著『英語のメンタルレキシコン』松柏社, 123-150
 - (7) 松本順子・堀場裕紀江(2007)「日本語学習者の語彙知識の広さと深さ」『第二言語としての日本語の習得研究』10号, 10-27
 - (8) 三國純子・小森和子・近藤安月子(2005)「聴解における語彙知識の量的側面が内容理解に及ぼす影響 —既知語率の閾値探索の試み—」『日本語教育』125号, 76-85
 - (9) 吉澤真由美(2005)「内容理解を目的としたL2読解における語彙学習と内容理解 —日本語能力による辞書・語注の効果の違いを探る—」『第二言語としての日本語の習得研究』8号, 24-43
 - (10) Andersen, R. W. (1984) The One to One Principle of Interlanguage Construction. *Language Learning* 34, 77-95
 - (11) Barcroft, J. (2007) Effects of Opportunities for Word Retrieval During Second Language Vocabulary Learning. *Language Learning* 57, 35-56
 - (12) Kawamura, Y., Kitamura T. and Hobara R. (1997)「日本語読解学習支援システム リーディング・チュウ太」(<http://language.tiu.ac.jp/>) (2007年1月11日)
 - (13) Laufer, B. (1998) The development of passive and active vocabulary: Same or different? *Applied Linguistics* 19, 255-271
 - (14) Laufer, B and Nation, I. S. P. (1995) Vocabulary size and use: lexical richness in L2 written production. *Applied Linguistics* 16, 307-322
 - (15) Melka, F. (1997) Receptive vs. productive aspects of vocabulary. In N. Schmitt and M. McCarthy (eds.), *Vocabulary: Description, Acquisition and Pedagogy*. Cambridge. Cambridge University Press, 84-102
 - (16) Mori, Y. (2003) The Roles of Context and Word Morphology in Learning New Kanji Words. *Modern Language Journal* 87, 404-420
 - (17) Mori, Y. & Nagy, W. (1999) Integration of information from context and word elements in interpreting novel kanji compounds. *Reading Research Quarterly* 34, 80-101
 - (18) Moroishi W. M. (2006) Reading for Meaning and Incidental Vocabulary Acquisition: The Case of Japanese. 『第二言語としての日本語の習得研究』9号, 5-22.
 - (19) Nation, I. S. P. (2001) *Learning Vocabulary in Another Language*. Cambridge: Cambridge University Press (邦訳: 吉田晴世/三根浩 (訳) (2005)『英語教師のためのポキャブラリー・ラーニング』松柏社)
(黒崎ーラボ日本語教育研修所, 松下-Victoria University of Wellington大学院生)

Adjectival Vocabulary Production by Intermediate and Advanced Korean Learners of Japanese

KUROSAKI Ami and MATSUSHITA Tatsuhiko

Producing words for conversation or composition is different from processing words receptively. In the productive use of a word, knowledge about context and collocation is essential, and the retrieval of the word is equally important. To explore the differences between the productive and receptive uses of a word, we conducted experiments in which intermediate and advanced Korean learners of Japanese were required in a free production task to recall words they had previously learned. The main findings are: 1) Compared to native Japanese speakers, the intermediate and advanced Korean learners of Japanese used more high-frequency and prototypical words, and fewer low-frequency words; 2) Compared to the production of second language (Japanese) words, these Korean learners of Japanese produced lower-frequency words in their first language (Korean). There was no difference in word frequency levels in the words both groups produced in their first languages (Korean and Japanese); 3) The level of vocabulary production in the free recall tasks for the Korean learners of Japanese had no correlation with the results of a grammar test and a controlled production test. In other words, the development of free vocabulary production is not in proportion to the development of controlled vocabulary production; 4) In cases where the learners could not free-recall the words that they could produce in the controlled production task, they tended to produce words whose meanings overlap with the unretrieved target words. These findings suggest that opportunities to retrieve and use words seem to be necessary to increase the size of free active vocabulary.

(KUROSAKI: Labo Japanese Language Institute,

MATSUSHITA: Graduate School, Victoria University of Wellington)